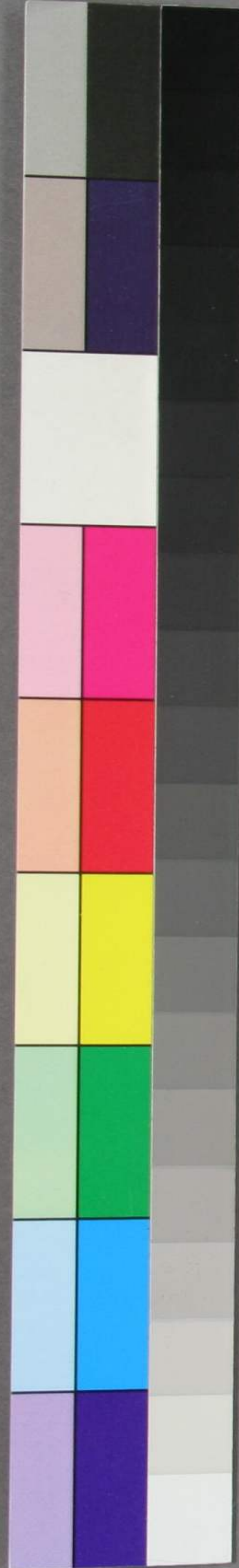


炷合傳私記

江府觀世家見昏

初版
五卷
傳

多9
1338
12



明 刁 幼
 號 1338
 卷 12



炷合香之傳系真行草灰之車

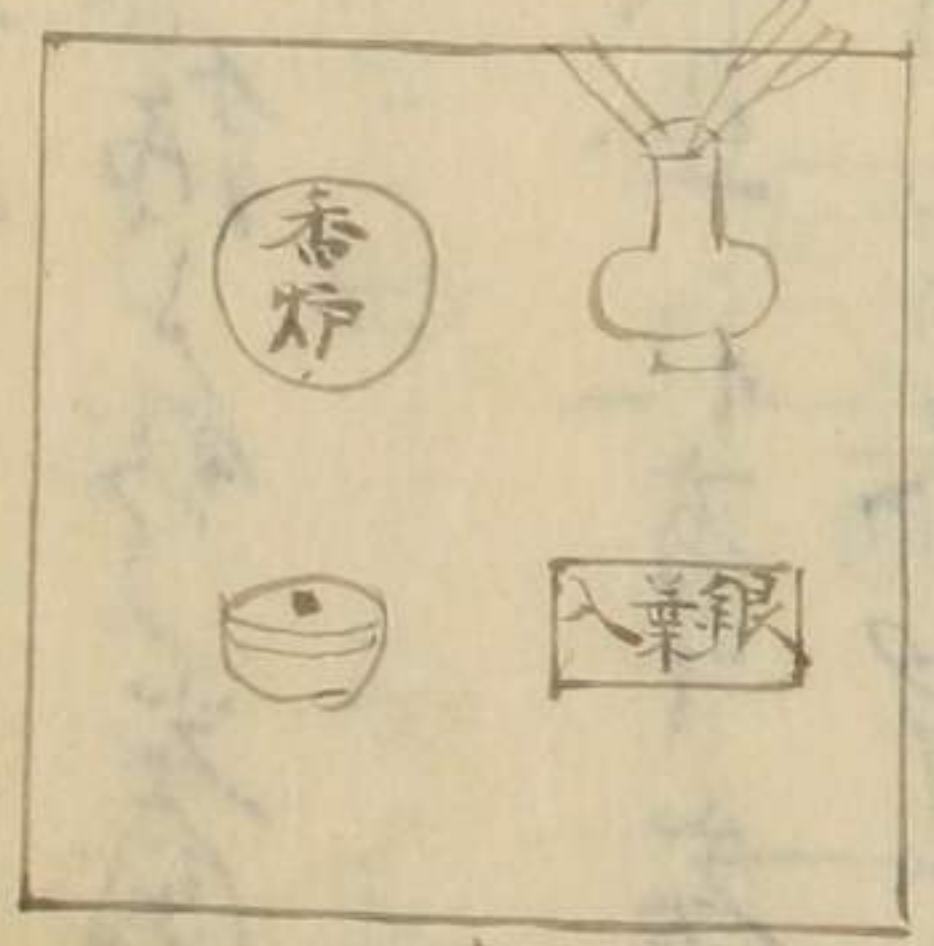
一香盆
 錯所長盆

右建木香
 火箸
 向銀葉入
 前炷空入
 左香炉



前

四角盆時
 先空入建銀葉
 香炉以順之



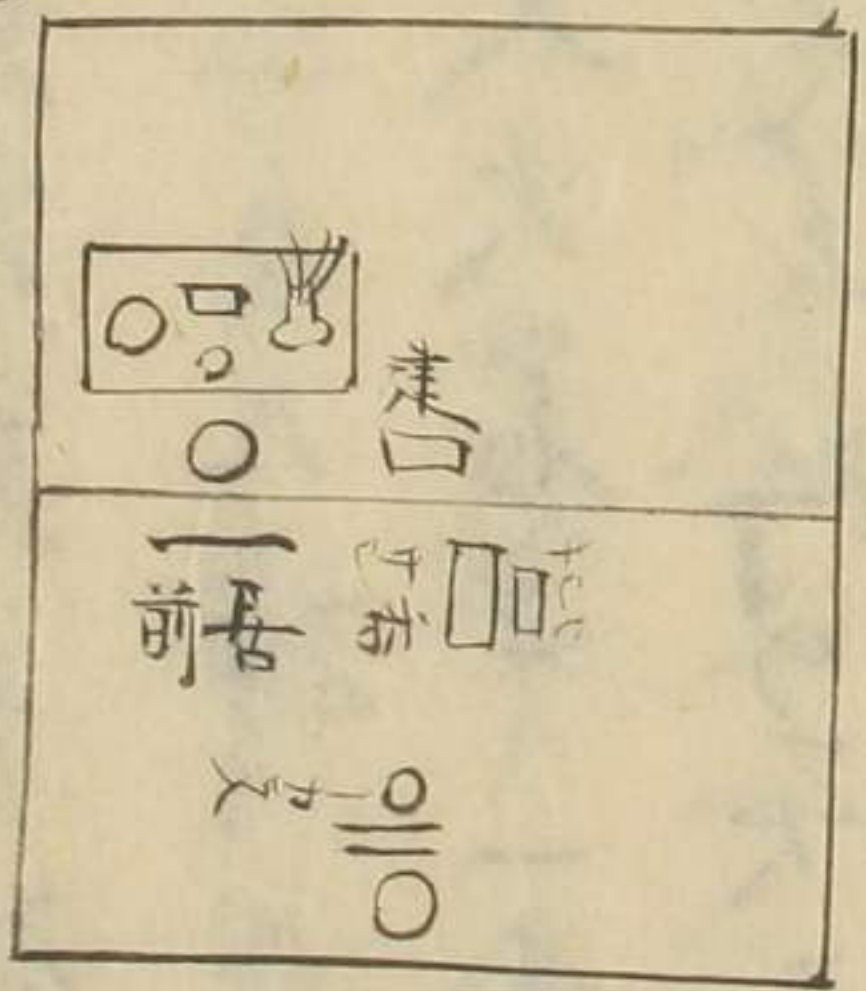
前

右の通り長巻。飾り付床の遠板、附書院を
 飾り付科紙硯水引り同形飾り付炭団
 小火取の取器を飾り付

一各座を着る主を交し只出れ有る炭団
 取器川なるとおしねとて又出る小火
 と火取器を川火とて大と取火器を
 座の取器とれとて座を出例の如く
 他例の如く左の方の座の
 取器は其器と火の器と

夫の床の長巻

取器を着る座も取器を
 先柱を入るとして火の
 器より半の三合を五合建
 と取盒の角の通し圓の如く
 銀をよるとよると左の
 横を打玉一建のち五合がと
 りと出し火の器とて
 火の器とて炭団をえと
 火の器とて炭団をえと



右の縁を拵居てか一向や出りしけり
たの袂にゆるゆるたるもむらり香があられ出
扱香こころもい香袋より出り煙出りの香と
たの縁の縁に香拵をゆるゆるとぬ折の
有る甲か又折て折口と向ふて右の方圓の
如く五火をとり其向うに五火を扱木
とぬきと盆の片を突き置くすまは根をいれ拵り
たのよりのせまのせま
右の縁の
をいれ置く 銀をゆるゆるとみ銀をいれゆるゆると

たの拵を扱居ては縁をゆるゆると
方角に拵置くもゆるゆるとけ主名物のまを拵り
右の縁にゆるゆると
縁をゆるゆると拵りえの建の糸に五火合
ゆるゆると香色と大開き木香拵と取香とゆるゆると
縁のゆるゆると香とゆるゆると建香拵の上を
試す盆のや作真中のむたのよ ぬい
とるの角ゆるゆると拵りゆるゆるとゆるゆると煙
ゆるゆると上巻ゆるゆるとゆるゆると煙ゆるゆると

の灰より上りて扱ふ事と又のりを片付
玉多の油を待りて盆の中へ我油の煙を
ととていかりのやうにして元の如く
油を又のり建のち、之を先香煙と
左のよへ入湯を又向ふ煙へ入ち建の右
入れあへし時香煙をふりて其時より是と
両より拵右のよへ香煙假のそのよへ
香煙ふ煙より多進 鼻をよへ出 さいなた拵

香煙のなる方世涯と扱ひ又右拵の右のせうい
扱ひ又左のよへ左のよへ拵をよへ 右拵の右の
側と扱ひ向のよへ鼻をよへて茶のよへて
よへて扱ひ鼻をよへて出てよへてい
よへてい 各香煙をよへてこれよへてい
茶のよへのよへていよへていよへてい
扱ひ餅り火取回若と拵膳のよへて火をよへ拵
拵出干餅り又拵若各香煙をよへて拵の

通一統有之記録あり常の如く結の如く
各記録と床の概より主として煙草を以て
此を半あり香炉の結あり袋を以て半あり半
有財を以て武居を以て出たすなり
一 洛の附より連号附合の如く 春秋を以て三種あり
五種也 一はく人扱多し 二種あり不捨其
と南を以て二種三種あり 南を以て二種あり
とて其 一は神秋を以て其 一は

長出たり附たり二種三種あり 一はく不捨其
と大概二種あり 一は後より一は
季の間に種之種つる有り 若し其あり二種
とも其 一は 一は 一は 一は 一は 一は
位より種あり 一は 一は 一は 一は 一は 一は
南を以て 一は 一は 一は 一は 一は 一は
る 一は 一は 一は 一は 一は 一は
之 一は 一は 一は 一は 一は 一は

沈香と檀香と余も准して今も年叔檀香と
別よ一種ありしに其年より結合沈香香
の外より多きを用ひる香也又と略して沈香と
し故に昔の結合は沈香と一種をのみ稱し
も有半分の且追加の種の名香の内は沈香有
て味苦辛酸也似と有るを今も類する
るも之は其源專ら用ひし沈香の一種なり
しもの今も味や位も結合を稱するも不用

此も香はかくも唯結の結合をもち用ひ
也者少き故に不用なり
半分の沈香と位遠くは古風を存して
沈香と隔るなり一帯結合の外は隔るは蘭
もたしは沈香なり

一梅檀と隔る年一通りも都て中んらんを
白くしは鼻へしや今今も種
の名とすしは名はすの種ありし
名香と檀香とありしをせんるんを

たゞ鼻と清くして名香と能きものなり
用々隔ふも又極細流る未梅標の穴に
法隆寺の御世火合と海峽有て其火合
されえし事及まんちやをふ時と東
大寺の火合とて枯木中川の火合とせん
あんち方下字やうしものまて六十一種
の火合のあり有て曲人とて指され
たるもの此の御合と名香其外色い

上下の香と徳合と半ツク先名香と燃ん
ちよあよせんものと燃ん人の名界をり法
又梅標の之加減とて火合と試し直つ海名香
と信くし梅標のあり火合るものつもの名香
とて大下字とありもの之細半とて高付
と法外梅標と記し法香のものなり
たゞ

